

医療の未来をつくる全国からの声

診療所探訪



外来診療も在宅医療も、 患者さんの思いに沿うことが大前提

2016年2月取材

兵庫県尼崎市
さくらいクリニック 院長

桜井 隆 先生

整形外科と内科の知識を生かし、地域の健康コンサルタントとして活躍する桜井隆先生。親しい友人に接するようなおおらかな人柄と、ユーモアあふれる語り口で、患者さん一人一人の思いを引き出し、患者さんの願いにかなう医療を心掛けています。

患者さんの腑に落ちるたとえ話を

患者さんに病気や服薬について説明する際、桜井先生はよくたとえ話を用います。例えば降圧剤を出す時は、「視力の低い人が眼鏡をかけ、『よく見えるようになった』とって眼鏡をはずすとまた見えなくなってしまおうでしょう。それと一緒に、血圧が下がったからといって薬を飲むのを止めないでくださいね」と伝えたりするそうです。「患者さんにいかに分かりやすく説明できるか。それはたとえ話というツールをいかに上手に使えるかということでもあると思います」と先生は話します。ある時、病院で虚血性心疾患と診断された患者さんが桜井先生にポツリと漏らしました。「先生、心臓って血の塊みたいなものでしょう。何で血が足りなくなるのかねえ」。それに対して、「銀行員は、目の前を何十億ものお金が流れていても、使えるのは自分の給料だけですよね。心臓も、自分のために使えるのは冠動脈を流れる血液だけなんですよ」と説明したところ、「先生、よう分かりました」と納得してくれたそうです。心のモヤモヤが晴れた患者さんは、治療にも身が入ることでしょう。



2012年2月に同じ町内で新築移転した同院。白を基調とした明るくスタイリッシュな内装と、緩やかに弧を描く階段が地域の人々を迎えます。

その人が自分の病気をどう捉えているか



悪い検査結果を伝える時などは、患者さんの真横に移動し、並んでモニターに対峙します。共に病気と闘う姿勢を示すことで、「ある意味で病気がコミュニケーションのツールになり得ます」と桜井先生は話します。

「患者さんが自分の病気をどう捉えているのか、とても興味があります。会話の中で少しツッコミを入れると、こちらの想定外の解釈をしていることに気付く場合が多いものですから」と桜井先生は話します。

患者さんのちょっとした言葉、言葉のトーン、仕草などを糸口に、病気のこと、病気を抱えた自分のこれからのことをどう思っているのかを引き出してあげることで、より本人の願いにかなう医療やケアを提供することができます。「“その人らしさを支える”ということですね。何か真面目な言い方で僕には似合わへんけれど」と先生は言って笑います。

在宅での終末期医療における心構え

桜井先生は、20年ほど前から在宅医療にも力を注いでいます。在宅での看取りの豊富な経験を基に、講演を行い、本も著しています。「本人に覚悟があれば、たとえ1人暮らしでも、自宅で最期を迎えることは十分に可能です」と話す先生は、度々講演会で「先生自身はどのような死生観を持っていますか」と聞かれると、「一人一人の患者さんやそのご家族から教えてもらったことをできるだけそのまま、バイアスをかけずに皆さんにお伝えしたいので、僕自身はあえて死生観を持たないようにしています」と答えられるそうです。「その人らしさ」を尊重する姿勢は、外来診療から在宅終末期医療まで、終始一貫しています。



2階のリハビリ室。専門の理学療法士による訪問リハビリテーションも提供している他、義肢装具士による義肢、装具、補助具の作成も行っています。